

小児泌尿器科

1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

科長（教授） 中井 秀郎
 医員（病院講師） 中村 繁
 医員（病院助教） 川合 志奈
 日向 泰樹

2. 診療科の特徴

1) 小児泌尿器科の成り立ちと特徴

泌尿器科医療における小児疾患の専門スタッフとして、また小児医療における腎尿路生殖器疾患の専門スタッフとして、臨床を担当している。泌尿器系臓器の機能・発生・解剖への習熟と、小児特有の成長発達への理解、さらに患児のみならず両親の心痛をくみ取って、はじめて小児泌尿器科の臨床が成立する。子どもへの興味や愛情、両親への十分な説明能力を礎とした専門的小児医療を心がけている。

2) 整備状況

外来は週3日、手術枠は週1.75日だが不足気味である。年度末入院待機患者は約50名と年々増加している。小児泌尿器専門で質の高い医療施設は国内でも数少なく、北関東におけるこの分野のセンターの診療科を運営する事は非常に意義がある。最近、首都圏、南東北からも紹介される頻度が増加した。外来診療は、慢性疾患の術前術後管理・経過観察や難治性尿失禁や夜尿症の診療、在宅自己導尿管管理などが多く占め、外来看護ケアの充実が急務である。入院診療は、乳幼児用細径内視鏡などの整備が進むなか、手術枠、病棟ベッド数の増加を図り、診療科としての体制をさらに充実させることが重要と考えている。

3) 当科対象疾患のあらまし

対象疾患の三つの柱は、乳幼児、小児の①腎・上部尿路疾患、②性腺生殖器疾患、③排泄障害、である。先天性疾患が多い。キャリアオーバーされた成人例も大学病院にて診療可能である。①は、有熱性尿路感染症や胎児超音波検査を契機とすることが多く、②は、出生直後から気づかれる男女外陰奇形、③は、神経因性膀胱や難治性夜尿症・尿失禁が多い。全身性多発性奇形の一部症としての泌尿器奇形も多く認め、関連各科とのチーム診療が不可欠である。他院で治療困難といわれてきた症例にも当科の十分な技術と経験を武器に積極的に対処している。

3. 診療実績

1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数	341人
再来患者数	3,651人
紹介率	80.9%

2) 入院患者数

1,435人

3) 全手術症例数 257例

全手術件数 258件

3-1) 手術症例病名別件数

先天性水腎症	8
膀胱尿管逆流症	23
停留精巣	63
尿道下裂	33
先天性尿道狭窄	33
陰嚢水腫	7

3-2) 術式（合併症）

腎盂形成術	8
腎摘除術	4
膀胱尿管新吻合術	9
内視鏡的逆流防止術	14
精巣固定術	63
尿道下裂形成術	23
女児外陰形成術	2
内視鏡尿道切開術	33
尿失禁手術	
膀胱頸部形成術	1
膀胱頸部注入療法	6
腸管利用膀胱拡大術	4
腹壁導尿管作成術	0
腹腔鏡手術	8

4) 主な処置・検査

排尿時膀胱尿道造影、排尿機能検査（ウロダイナミクス）、膀胱尿道内視鏡検査、上部尿路機能検査、ラジオアイソトープ検査、超音波検査

5) カンファレンス

5-1) 診療科内

手術カンファレンス（火曜）、外来カンファレンス（木曜）、抄読会（火曜）

5-2) 他科合同

小児画像診断部・小児科（腎臓）・小児泌

泌尿器科合同カンファレンス（火曜）

5-3) 他職種合同

二分脊椎カンファレンス（月1回月曜）

4. 事業計画・来年の目標等

1) 手術枠の増加

現在、週あたり1.75日という手術枠数は過少で、社会的需要を満たすには、困難な数値である。小児泌尿器科の専門医が極めて少ないことを解消していくために、今後、大学にて積極的に専門医養成を図ることが重要と思われるが、この観点からも一定の手術件数は必要であり、手術枠の増加を切望している。当面週2.0日を希望している。

2) 小児チーム診療の意識の共有と円滑化

- ①腎機能障害、腎盂腎炎などの精査治療に関して、小児科（腎臓）や小児画像診断部との定期的カンファレンスを継続させる。
- ②性分化異常症、性別不明外性器の診療に関して、新生児科、小児科（内分泌代謝）、婦人科との連携診療を強化する。
- ③排泄管理において、小児外科、看護師との連携チームを円滑に機能させる。（小児排泄管理学の概念の拡充）
- ④二分脊椎において、小児脳神経外科、小児整形外科、小児外科、リハビリテーション技師、看護師などと、外来診療時間を同調させて専門外来化し、効率的診療を図る。

3) 臨床的医学研究

- ①小児の排泄機能異常の臨床を体系化するとともに、医学的・社会的認知度を高める。（尿失禁や便通異常の科学的評価を確立する。）
- ②膀胱作用薬の小児への安全性と有効性の検討。
- ③小児泌尿器科内視鏡下・鏡視下手術の発展。